

自明視したものが崩れたとき

——異文化接触の衝撃と成功のパラドックス——

木 村 英 憲

I 問題の所在

人はふだん意識しないで行動している。たとえば食事をするときにご飯茶碗をもって食べる。しかしこれはご飯茶碗は置いたままにして、箸やスプーンを口に持ってくるのが作法とされるお隣の国の韓国や北朝鮮では無作法と評価されて、そういう食べ方をする人の品位が疑われる。しかしそれはたまたま隣の国ではそうになっているだけで、日本式の食べ方が絶対に品がない食べ方だという実体とか本質があるわけではない。このように文化は相対的であるという見方は、しかし、自分の周りの人間がたとえば食事をするときにご飯茶碗をもって食べる食べ方をする人の場合にできる見方だ。これが周りが否定視する人ばかりだと、このような相対化する見方は可能だろうか。

同じように意識しないものとして価値観がある。価値観とは、何をもって努力や犠牲を払って獲得するに値するか、言い換えれば何が努力に値するもの、犠牲に値するものとみなすかにかかわるものの見方とここでは定義する。たとえば、細身の体は食べたいものを我慢してでも獲得する価値があるとされ、そのやせて希望する体重になった自分には自信が持て、水着も堂々と着ることができる。同様にきれいな肌はエステに行くお金をかける価値があるし、化粧品代の価値があるとされている。美肌の自分は人前に肌をさらしても恥ずかしくないが、しわやしみのあるすっぴん顔はファンデーションなどで隠したい。価値観は自分は何者であるか（ここではスリムだ versus 太っている、美肌だ versus 肌が汚い）の判断基準になり、そして自分への肯定的な感情、否定的な感

情を生み出す要因になり、ひいては他者への優越感、劣等感を生み出したりする。

この価値観は個人差というよりたまたま生れ落ちた時代や国によって異なる可変的なもの、恣意的なもの、言い換えれば相対的なものであるが、その時代に生きている当事者にとってはそのようには見えなく、自明視されたものである。その自明視された価値観が、正確に言えば自明視されている価値観がこれは努力や犠牲に値するとして、その到達目標に近づくことを生きがいとか張りにしてきたことが、価値観の異なる異文化や過去の時代には、あるいは未来には、もしかしたら紙くずのような価値しかないものだということがあらわになったときの衝撃はいかばかりのものだろうか。

そのような衝撃を与えるものとして異なる価値観との遭遇がある。異文化との遭遇がもたらす衝撃には、物事のやり方、手順、習慣の違いもある。異文化のもたらす衝撃は学校の教科書で箇条書きに提示されても、いわば知識の対象として提示されて生じるものではない。それは実際に外国に暮らして、自文化の常識が通じないところに身をおいて初めて生じるものである。

その事例として小論では3つの事例をとりあげ検討する。1つは韓国で果たせなかった韓国の夢を日本で敗者復活を求めたある韓国女性を取り上げ、その衝撃をみでみる。2つ目には日本人が親切心からやることを子ども扱いをされていると感じるアメリカ人の事例を取り上げ、自立という価値の相対性のもたらす衝撃を検討してみる。最後に、犠牲や努力自体に無理があつて、価値あるものとされていることを獲得としたものの違和感

という形でそれらに価値がないという感覚に苛まれた日系米国人2世、ジーン・オオイシを取り上げる。

II コリアンドリームに敗れて

呉善花（お・そんふぁ）という済州島に1958年に生まれた韓国人女性がいる。彼女は人からうらやまれるような高い社会的地位について豊かな暮らしをしたいと思っていた。そしてだれもがみなこういう夢を持っていると信じて疑わなかった。彼女の生まれ育った韓国は、たとえばうどん屋の仕事にずっと就いていることは恥であった。うどん屋からさらに高い職業に就くのが当然とされていたからであった。より高い社会的地位にすることが人々を長時間にわたる受験勉強へと駆り立てる社会的な心理的起動力であった。

あまり裕福でない家庭で生まれた彼女は成功に必要な学歴が重要なことは知っていたが、正規のルート迂回して、授業料が免除されるばかりか給料までも出る陸軍大学に入った。しかし女性では軍隊でトップになれないことを知っていた彼女は積極的な男子学生と恋に落ちた。将来トップになれる見込みのありそうな男性と恋をして結婚することはコリアンドリームへの近道であったからだ。

しかし彼女が積極的と思ったこの男性の態度は彼女の本音ではずうずうしいと感じられるものだった。しかしそれを抑圧しこの人はいい人と自己欺瞞をした。しかしこういう恋は長続きしない。この恋は破れてしまった。それに伴い彼女のコリアンドリーム実現の企ても挫折した。

彼女にとってコリアンドリームを少しでも実現することが生きがいであり張りであった。その生きがいの元をそうやすやすとあきらめるわけにはいかなかった。彼女は日本に留学して、英文学者として身を立てるという代替コースを選んだ。その背景には実家にもどるわけにはいかないという事情があった。それは適齢期を過ぎても結婚しない娘がいる家の弟や妹も何か問題があるのではと目される危険があり、そういう迷惑をかけたくなかったからだった。

韓国では何でもない習慣が

日本に来て彼女を悩ませるようになったことが4つあった。1つは韓国では何でもない習慣を日本で無意識にやったことだった。その習慣とは値切ることだった。近くのお店の主人も最初は値切りに応じていたが、そのうち彼女を避けるようになった。この値切るという韓国では何でもない慣習が日本ではあつかましいという意味を持つと想像ができなかった彼女は、日本人が彼女が韓国人だから差別しているとり、疎外感、孤独感に悩んだ。

こののけ者にされているという感覚は他のことでも感じた。ある日、日本人の友だちと食事したときのことだった。そこには別の日本人の友だちもいたが、お互いは初対面だった。支払いの時になるとその知らない同士の日本人が自分たちで払うから呉善花に払わせようとしなかった。これは呉が外国人で何かとお金もないかもしれないからという気遣いからというように呉は思えなかった。自分をのけ者にしていると感じた。

コリアンドリームを求めにきた若い韓国人女性

そんな彼女の気持ちを癒してくれたのは別のやり方でコリアンドリームを求めにきた若い韓国人女性たちだった。大学院で勉強していた呉は貿易会社で翻訳などの仕事もしていた。そのためコリアンバーなどに出かせぎに来ていた若い女性たちに日本語を教えたりして、お姉さんと慕われていた。

しかしそんな彼女もこれら若い同郷の女性には、金にならない勉強をして何をしているのかしら不思議に思えた。彼女たちはバーで稼いだお金、時には愛人になって稼いだお金で国の弟や妹のコリアンドリームの実現のため、具体的には大学の学費のために仕送りをしてきたからだ。親しまれている若い子たちからそのような視線を向けられ彼女は傷ついた。

社長になろうとしない同僚

彼女に追い討ちをかけたのは、貿易会社の男性社員たちだった。呉は彼らも将来の夢は当然、社長になるか自分で会社を興して社長になるものと思っていた。しかし将来の夢を聞くと、家族がし

あわせに暮らせるだけの収入があればいいとか、休みに温泉に行くことが楽しみという答えが返ってきた。そのような夢しか持てないのに、暗い顔もしないで微笑を浮かべているこれら同僚が不思議でならなかった。

だれしものが当然トップを目指すかと思ったらそうでない現実、しかも別に暗い顔をしない現実が彼女を追い詰めた。何が何だか分からなくなり、一時は自殺までも考えた。それほど混乱した。

ショックの向こうに

しかし友だちの勧めもあり1年間ヨーロッパで暮らした。余裕を取り戻した彼女は、そうだ人は必ずしもトップにならなくてもいいのだ。逆にそのために今、ここにある些細な幸せが見えなくなるのだという境地に達した。

III いつでも自立した大人でなくていいという衝撃

筆者は交換留学生とホストファミリーの間に立って両者から相談を受ける仕事をしたことがある。あるときホストファミリーから電話があって、預かっているアメリカ人の高校生の男の子とファミレスで食事をしようとしたら、かたくなに食べようしないと言うのだ。その子に聞いてみると、おごってもらうだけのことはこの家族にしていけないと言う。家族でも何か貢献しないとこのような待遇をされるのは、子ども扱いされているようだと言うのであった。

ジョセフ・トービンというハワイ大学の文化人類学者がその博士論文で40人の日本に滞在しているアメリカ人に聞き取り調査をした。あるアメリカ人社長の話であるが、日本語ができないので秘書がいつも助けてあげていた。ある日曜日、鎌倉に旅行に行くというので、この秘書は心配で湘南電車は何番線ですよと教えようとして、東京駅まで行った。この社長は秘書は子ども扱いしていると激怒した。

時には甘えていいという考え方のある日本に来て、いつも自分のことは自分でやらないと何かに依存した子どものようになってしまうという恐怖心からか、素直に助けてくれと言えなかった無

理が爆発したものと言えるかもしれない。

IV アメリカンドリームを実現したものの

ジーン・オオイシという1933年生まれの日系2世がいる。彼はメリーランド州の一流紙『ボルティモア・サン』という新聞社の記者になり、さらには知事広報担当官にまで上り詰め、いわゆるアメリカンドリームを成し遂げた人物である。にもかかわらず予想外の行動をしたり予想外の気分に陥ったりした。

ある感情の爆発 1979年, 46歳

広報担当官のオオイシのところにかつての同僚が『ボルティモア・サン』の記者として至急、知事に会いたいと言って来た。用件を聞いたオオイシにかつての同僚は話せないと言う。話せばオオイシと知事が「知恵を出し合い、答を工夫するに決まっているから」と言った (p. 217)。この言葉を聞いてオオイシはこの同僚は自分が知事と共謀して「効果的な嘘をでっち上げる」と言っていると思った。気がついたら「何を言ってるんだ、この馬鹿!」と怒鳴っていた。オオイシの剣幕に驚いた同僚が後ずさりをして部屋を出て行くまで、オオイシは怒鳴り続けた。

このような過剰反応をしてしまった理由についてオオイシは「それまで、そんな形で信頼性や人格を疑われたことはなかったから、どうにも耐え切れなくなったのである」と後から振り返って言う (p. 219)。

振り返ってみると、その前兆はあったと言う。それは鬱状態に陥っていたことだった。夏休み休暇でスイスに行っても以前のようにハイキングする気力が起きなかった (p. 219)。幻覚にも悩まされるようになっていた。

妻子を乗せた旅客機が海の中に突っ込む光景が浮かんで来て、それを恐れているのか望んでいるのか分からない。ぼくは自分がばらばらになっていくように思えてきた。(p. 220) さらには不倫までして、妻と別居したが、なおも気分はすぐれなかった。

夜遅くなど一人していると、自分が家族を失い世の中にひとりぼっちにされた気がした。

ぼくはピストルを買ってきて、弾薬を込めっぱなしにしておいた。寝るときはベッドの中に持ち込んだ。時には、撃鉄を上げ、銃口を自分の頭に向けた。引き金をひこうと本気で考えたわけではなかったが、ピストルを手に持ち、そうと思えば即座に人生に終止符を打てるということが何かしらの慰めにはなった。(p. 221)

このような悩みの源泉は自分の中の日本人らしさを否定して、抑圧した上で、アメリカンドリームを成し遂げたためであることを、オオイシは発見していく。そのきっかけは、1976年、43歳のときの読書だった。

小説中の人物が父の死に臨んで「ぼくは日本人だ」という言う箇所を読んで感情が昂って、涙が溢れて止まらなくなった。(p. 225)

さらに1981年、48歳のとき、「戦時アメリカ市民強制疎開および強制収容問題調査委員会」の報告を読んで、彼は次のような経験をした。

自分の感情に圧倒されてしまい、泣き崩れることになるのを防ぐため、しっかりと台を挿んでいた。(pp. 226-227)

いつも控えめで地味な「ニセイ」が涙ぐんで声をつまらせたり、涙ながらに話したりした。聴衆の中の若い日系人は、彼らの父親の世代がこれほど感情を表に出したことに驚いた。「ニセイがあんなふうになるのは初めて見たよ」というのが聞こえた。(p. 227)

1982年、49歳のとき、『ナショナル・ジオグラフィック』とフリーの立場で契約して日系人を取材していくうちにサンセイの目には自分たちニセイは画一的、没個性的と映ることを発見した。

ロサンゼルスでサンセイのジャーナリスト、ドワイト・チューマンは、1940年代のニセイのことを「若さで混乱しており、自己嫌悪を売り物にし、主流派の考え方の中に姿を隠していこうとしていた」と評した。つまり、笑顔を絶やさず、せっせと働き、頼りにできる「いい人(ナイス・ガイ)」専門の役だともいった。(中略) ぼくたちはみな「いい奴」なんだ、残念ながら、「ニセイ」に欠

けているのは、下品で、下劣で、声がでかく、嘘つきで……(p. 231)

ニセイのソーシャル・ワーカーのアミー・イワサキ・マスから次のような解釈を聞いた。

6歳のとき収容所に入れられ、長年「楽しい」経験と思っていた。精神分析してみると、感情を抑圧していたことに気がついた。感情を抑圧するのは、それが自分の身を守るための手段だからであり、自分の政府から敵視されている恐ろしい現実から目をそらせようとするものなのだ。ほとんどのニセイが明朗快活で非攻撃的態度をとり、見出しなみや外見に気をくばり、表面的な価値にこだわるのは、それが保護色として役立つからだ。(p. 222)

日本人 vs ニセイ、イッセイ vs ニセイ

オオイシは日本にいる日本人は個性豊かな人、静かで内気な人、騒々しく攻撃的な人、物腰の低い人、無礼な人と千差万別で個性豊かなのに「アメリカにいる我々日系人は、その中のほんの狭い部分に閉じ籠もってしまっている」(p. 232)と感じるようになった。さらには1世と2世のちがいにも目を向けるようになった。

「イッセイ」の父や父の飲み仲間、遊び友達は、よく働くと同時によく遊び、それぞれ違った個性を持っていた。彼らがみな正直だったり、頼りになる人柄であろうはずがない。集団としては、彼らの世代「ニセイ」とはきわだった対照を見せている。ニセイのほうは揃いも揃って、物静かで従順で気だてが優しくなっている。(p. 233)

オオイシは1984年、51歳のとき、アリゾナ州ヒーラーの強制収容所を再訪した。このとき感情の爆発の深因に気がついた。

それは1942年、9歳のときにさかのぼることだった。

その砂漠を愛していたことに気がついた。最初の数週間砂漠が怖かったのだが、ぼくが新しい環境に馴れるにつれて、恐ろしいのはヒーラーではなく、その外側の世界、ぼくたちが爪弾きした世界になったのだ。

そのときの恐怖が今でも去らず、生涯すべ

ての面につきまわっていることに、ようやくぼくは気がついた。なぜぼくは、知事に会見を求める記者を怒鳴りつけたのか。その理由は、彼がぼくを怖がらせたからだった。ノートを取り出し、なぜだか分からないが、ぼくの一言一言をそこに書きとめた。彼がしていたことは、ぼくが二心ある人間で、知事とぐるむようになって報道陣と一般大衆を瞞そうとしているというに等しいものだった。1942年の白人の行政当局も、すべて日系アメリカ人が不忠なのではなく、忠誠心を持つ者とそうでない者とを区別する方法がないのだといっていた。こうした東洋人は不可解だという固定観念が、西洋人の心の中にしっかりできあがってしまっていて、誰も真剣に検討しようとしなないのだ。それだからこそ、ぼくたちは全員が疑われ、全員が家を追われ、強制収容所の中に押し込められたのだ。(pp. 237-238)

オオイシはさらに続ける。

最初は、現代のホレーショ・アルジャーばりの立身出世物として、アジア系アメリカ人の威勢のいい連中を何人か取り上げ、彼らが苦難にもめげず成功するという、調子のいい記事にまとめるつもりでいた。(中略)ぼくはご免という気がした。それを書いたら、日系アメリカ人の苦難の道から逸脱してしまうことになる。日系アメリカ人の幸福な面だけを描くのは無理だ。ぼくたちの多くが、特に「ニセイ」がいまだに精神的に病んでいるのに。(p. 238)

エスニックアイデンティティの復活

オオイシは封印していたものに向き合う。

ぼくたちには同じ民族の血が流れ、そこには独自の性格があり、歴史があり、人種差別の思い出がある。ぼくたちのルーツは深く走って、互いにかみ合っている。日系人と話していると、まさに自分を見ている思いがした。故郷に帰った気分であった。(p. 239)

そして自分が無意識のうちにしていたことが見つく。

ぼくはアメリカ人だが、人種的には日本人だ。一時期のぼくならこの中に矛盾を感じただろう。仲間のアメリカ人の人種差別的なものの見方に迎合しすぎていて、ぼくまでが反日を唱える人種差別主義者になっていたのだ。(p. 241)

オオイシはついにある試金石、「残虐な日本人」という偏見を解体する。

チャーチルの『英語国民の歴史』イングランド人もスコットランド人もアイルランド人も、日本人に負けず劣らず残酷だった。

日本軍の残虐行為の数々(南京での大量殺人、婦女陵辱。金品強奪や「バターン死の行進」)は、まったく弁護の余地がない。それでも擁護するような事情はないか、少なくともうまく説明できないか必死になって探したが、満足できる答はまったく見いだせなかった。(pp. 242-243)

しかしビルマのイスラム教徒数百人が仏教徒に殺される事件がこの相体化の前に立ちはだかる。

取材にあたって会ったあるパキスタン人は、(中略)仏教とは偽善者だとぼくを罵り、睨みつけ、ぼくがビルマの仏教徒の行動を弁護するか、代わって詫びるかまっていた。ぼくはもちろんどちらの態度も取れなかったが、この男はぼくに自分が悪いことをしたような罪の意識を植えつけた。このとき感じた罪の意識は、どう考えてもまったく理由が説明できないものであり、これが結局、大いにぼくに役立った。悪事を犯したのがたとえ日本人であったにせよ、それをぼくが弁護したり詫びたりする必要はないというということが、やっと分かってきたのであった。(pp. 243-244)

この「罪の意識」をオオイシは人間性一般に解消する。

日本人が悪いことができるのは人間だからであり、人間だからどの民族も有史以来、人には語れぬような残酷で残忍な行為の数々を犯してきたのだ。ぼくの中に悪の種子があるとすれば、それがあるのは人間だからだ。

そして人間だから、ぼくの中には善を行う余地もある。ぼくも他の人と同様、善悪どちらを選んでもいいのであり、人種を理由に恥じたり絶望したりするのは間違いなのだ。にもかかわらずなぜ罪の意識をもったのか？ (p. 244)

ぼくが収容所に入れられたのは人種差別と戦時下のヒステリー現象のためであると知っても、ぼくの恥と罪の意識はなくならなかった。第二次大戦中に、ぼくは反日感情に染まっていった。他のアメリカ人のように真珠湾攻撃に怒りは向けなかったが、その代わりに、日本が悪いことをしたという罪の意識をもったのだ。その後、日本軍の虐待行為を聞かされて、ぼくは恥ずかしく思い、重ねて罪の意識をもった。ぼくたち日系人は、強制収容されるに値する。ぼくも何らかの報復処置が取られることを望んだ。ではどうすれば、自分を報復の対象にできるのか。(pp. 244-245)

オオイシはしかし自分はそして2世は別のやり方でこの罪の意識に向きあったと言う。

ぼくは自分の中にいる日本人を殺そうと、ひたすら白人の世界に入り込もうとした。長年にわたって、これはうまくいった。白人社会で成功することができたし、受け入れられた。(中略)自分がある役を演じているように感じることも多かった。ぼくの仕事にしても他人に誇れるようなものではない。それらはどれも、ぼくが過去から現在まで演じている人物の仕事であって、ぼくの仕事であるとはいえない。同様に、失敗しても平気でいられる。自殺や死さえ、ぼくはそれほど恐ろしくはない。本当はそこにいない誰かを殺すことはできないだ。しかもずっと前からいなのだ。(p. 245)

しかしオオイシはアメリカ流の個人主義でもって、落しどころを探ろうとする。

ぼくたちは過去の経験の集積だ、とは必ずしもいいきれない。というのは、ぼくたちは心を萎縮させて、現在の状態、あるいは現在なり得る状態よりもみじめな状態になれるか

ら。それこそぼくが、そして非常に多くの日系アメリカ人がしてきたことなのだ。1941年12月7日、真珠湾に向かって落とされた爆弾は、一連の事件を引き起こし、それがぼくから、ぼくの過去を、ぼくの両親、家族、そして子供らしさを奪ってしまった。ぼくから切り離された子供の部分は、ぼくの本質的な部分である。ぼくはその子供にヒロシという名をつけ、何とか彼を探しだそう、これまで小説やノンフィクションの中で彼のことを書いてきたのだが、いつもすると身をかかわされる。

ヒロシのことを書き始めたのは、1965年ごろで、第二次大戦によってぼくが真つ二つにされたのではないかと感じたからだった。アメリカ人としての半分は生き残り、日本人としての半分は衰弱し、やがて死んだと思っていた。ヒロシというのは、双方が一体化していた子供の頃の最後のイメージだ。彼は「ミソシル」を飲み、天皇の誕生日には「バンザイ！」を唱え、アメリカ人でもなく日本人でもない。一言でいえば、「ぼく」だ。(pp. 245-246)

IV 最後

ある社会、ある時代で犠牲や努力の価値のあるものとされているものを、自分の正直な感覚(呉の場合、恋愛感情、オオイシの場合、彼のなかの日本人)を犠牲にしても実現するものかどうか、この発見にはショックという契機をへないことには発見ができない可能性のあることが見えてきた。逆に言えばこのような無価値化の衝撃は逃げ出さないで我慢して向き合えば、広々とした地平が開けてくることになるという光のストーリーでもある。異文化との遭遇による無価値化、成功の暁の無価値化にはこのような意味があるのだろう。

参考文献

※直接参考にした文献には*をつけてある。それ以外には日本人がアメリカに滞在して受けたショックにつ

- いて語っているものである。
- 青木富貴子. 1992. 『たまたま日本人』. 文春文庫.
- 阿川尚之. 1986. 『アメリカン・ロイヤルの誕生——ジョージタウン・ロー・スクール留学記』. 中公新書.
- . 1993. 『アメリカが嫌いですか』. 新潮社.
- アキタ, ジョージ著, 広瀬順皓, 牛尾四良訳. 1993. 『大日本アメリカの脅威と挑戦——リビジョニストの思考と行動』. 日本評論社.
- 秋葉忠利. 1986. 『真珠と桜——「ヒロシマ」から見たアメリカの心』. 朝日新聞社.
- . 1989. 『アメリカ人とのつきあい方』. 岩波ジュニア新書.
- *アクスフォード, ロジャー. 1986. 『リロケーション——日系米人強制収容所の証言』. 西北出版.
- アспект編集部. 1991. 『女性たちのMBA 国際派ビジネスに賭けるニューキャリア』. ビジネス・アスキー.
- 雨宮和子, 大井恭子. 1986. 『アメリカを暮らす——カリフォルニアとロングアイランド』. 旺文社文庫.
- 天羽君子. 1991. 『アメリカン・ドリーム——コロンビア大学のキャンパスから』. 勁草書房.
- アントラム 栢木利美. 1993. 『日本とアメリカ逆さの常識——暮らしの視点から見た日米の「ミゾ」』. 主婦と生活社.
- . 1994. 『日本とアメリカ愛をめぐる逆さの常識——驚くほど違う! 日米心の断層』. 主婦と生活社.
- 飯坂譲二. 1985. 『ワシントン家族日記』. 山海堂.
- 飯泉美耶子. 1981. 『ニューヨーク郊外の学校で——息子たちの体験から』. 朝日ソノラマ.
- 家田荘子. 1991. 『イエローキャブ——成田を飛び立った女たち』. 恒友出版.
- . 1992. 『現職の愛に抱かれて』. 青春出版社.
- . 1995. 『離婚』. 講談社.
- 池上千寿子. 1988. 『やがて悲しいアメリカ人』. はまの出版.
- 池関光久. 1993. 『カナダ・ライフ——単身赴任レポート』. 草思社.
- 池田満寿夫. 1975. 『私自身のアメリカ』. 講談社文庫.
- 砂金玲子. 1990. 『ニューヨークの光と影』. 朝日文庫.
- 石川好. 1988a. 『ストロベリー・ロード上』. 文藝春秋.
- . 1988b. 『ストロベリー・ロード下』. 文藝春秋.
- . 1990. 『ストロベリー・ボーイ——ストロベリー・ロード PART 2』. 文藝春秋.
- . 1992. 『アメリカの歌をもとめて——「1992年アメリカ」への旅』. 中央公論社.
- . 1994. 『ガーデン・ボーイ——ストロベリー・ロード PART 3』. 文藝春秋.
- . 1995a. 『ストロベリー・ロード再び 第1回 イチゴ畑のアメリカ物語』. ビデオ NHK 教育テレビ.
- . 1995b. 『ストロベリー・ロード再び 第2回 花の谷の開拓者』. ビデオ NHK 教育テレビ.
- 石戸谷滋. 1991. 『日本を捨てた日本人——カリフォルニアの新一世』. 草思社.
- 板坂元. 1973. 『ああアメリカ——傷だらけの巨象』. 講談社現代新書.
- . 1978. 『アメリカ診断』. 講談社.
- 井出義光. 1978. 『南部のもう一つのアメリカ』. 東京大学出版会.
- 伊藤一男. 1990. 『桑港日本人列伝』. PCM 出版.
- 稲毛教子. 1989. 『私のアメリカ滞在記——小さな発見と大きな体験』. 興学社.
- 稲村博. 1975. 『日本人の海外不適應』. NHK ブックス.
- 犬養道子. 1969. 『私のアメリカ』. 新潮社.
- . 1978. 『アメリカン・アメリカ』. 文藝春秋.
- 今泉敦子. 1991. 『思いきり異邦人』. 星雲社.
- 入江健二. 1991. 『リトル東京入江診療所』. 草思社.
- 上杉忍. 1993. 『アメリカ南部黒人地帯への旅——黒人運動の源流をたずねて』. 新日本出版社.
- *———. 2000. 『二次大戦下の「アメリカ民主主義」』. 講談社.
- 浦田誠親. 1994. 『アメリカの小さな大学町——クオリティ・オブ・ライフ』. 玉川大学出版部.
- 江崎真佐子. 1976. 『江崎玲於奈一家のアメリカ日記』. サンケイ出版.
- 江崎玲於奈. 1980. 『アメリカと日本——ニューヨークで考える』. 読売新聞社.
- 枝川公一. 1985. 『開けてみればアメリカン』. 旺文社文庫.
- 江藤淳. 1991. 『アメリカと私』. 文春文庫.
- 江成常夫. 1984. 『花嫁のアメリカ』. 講談社文庫.
- NHK 取材班. 1990. 『キャリア・アップニューヨークに賭ける女たち』. 日本放送出版協会.
- *オオイシ, ジーン. 1989. 『引き裂かれたアイデンティティ——ある日系人の半生』. 岩波書店.
- *大谷勲. 1983. 『他人の国, 自分の国——日系アメリカ人オザキ家三代の記録』. 角川書店.
- 大森節子. 1994. 『私のアメリカ手話留学——デフ社会の日本とアメリカの文化比較』. お茶の水書房.
- 岡田光世. 1993. 『ニューヨーク日本人教育事情』. 岩波新書.
- *沖本, ダニエル. 1971. 『仮面のアメリカ人——日系二世の米国観と日本人論』. サイマル出版会.
- 奥井智之. 1994. 『日本問題——「奇跡」から「脅威」へ』. 中公新書.
- 尾崎茂雄. 1980. 『アメリカ人と日本人』. 講談社現代

- 新書。
- *呉善花. 1990. 『スカート風の風』. 三交社.
- *——. 1991. 『続スカートの風』. 三交社.
- *——. 1997. 『日本人を冒険する』. 三交社.
- *——. 2001. 『縄文思想が世界を変える』. 麗澤大学出版会.
- 小田実. 1969. 『何でも見てやろう』. 河出書房新社.
- . 1976. 『アメリカ』. 角川文庫.
- 越智道雄. 1988. 『アメリカ「60年代」への旅』. 朝日選書.
- 落合信彦. 1984. 『アメリカの狂気と悲劇』. 集英社文庫.
- . 1987. 『アメリカよ! あめりかよ!』. 集英社.
- 小野啓子. 1984. 『アメリカン・ハイスクール・ライフ——17歳の留学体験記』. 旺文社文庫.
- 小原信. 1978. 『新・アメリカ見聞録』. PHP 研究所.
- 海外子女教育振興財団. 1983. 『私の海外勤務時代』. 財団法人海外子女教育振興財団.
- 柏岡富英. 1992. 『「移民国家」の理想と現実』. 梶田孝道編『国際社会学——国家を越える現象をどうとらえるか』. 名古屋大学出版会.
- 梶田正巳. 1983. 『ボストンの小学校——ありのままのアメリカ教育』. 有斐閣選書.
- 加藤典洋. 1995. 『アメリカの影——戦後再見』. 講談社学術文庫.
- 加藤秀俊. 1967. 『アメリカ人——その文化と人間形成』. 講談社現代新書.
- . 1977. 『アメリカの小さな町から』. 朝日新聞社.
- . 1979. 『ホノルルの街かどから』. 中公文庫.
- 加藤恭子. 1985. 『こんなアメリカ知っていますか』. 中公文庫.
- カニングハム久子. 1988. 『海外子女教育事情』. 新潮選書.
- 亀井俊介. 1975. 『アメリカ人の心日本人の心』. 日本経済新聞社.
- . 1994. 『アメリカの歌声が聞こえる』. 岩波書店.
- 亀井俊介編. 1977. 『日本人のアメリカ論』. 研究社.
- 亀井俊介, 鈴木健次編. 1992. 『自伝でたどるアメリカン・ドリーム』. 河合出版.
- 加茂利夫男. 1983. 『アメリカ二都物語——21世紀への旅』. 青木書店.
- 川恵美. 1991. 『彼女がニューヨークに行った理由』. PHP 研究所.
- 川井健男. 1992. 『銀行員ニューヨーク物語』. 学生社.
- 川久保美智子. 1991. 『日米社員の意識比較』. 講談社出版サービスセンター.
- 川滝かおり. 1992. 『国際結婚物語パートナーは世界中から』. 廣済堂出版.
- 岸本裕紀子. 1991. 『13人のセカンド・トライ私たち
の留学サクセス物語』. 徳間書店.
- 木村建. 1995. 『アメリカで医者をするにはわけがある——在米外科医の見た日米事情』. 草思社.
- 栗原奈名子. 1994. 『ニューヨーク自分探し物語——怒る女は美しい』. wave 出版.
- 桑原勢津子. 1974. 『アメリカ生活旅行——住居・アルバイト・学校案内』. 白馬出版.
- 小池和男. 1993. 『アメリカのホワイトカラー——日米どちらがより「実力主義」か』. 東洋経済新報社.
- ゴーマン美智子. 1980. 『走れ! ミキ』. 文藝春秋.
- 粉川哲夫. 1985. 『ニューヨーク情報環境論』. 晶文社.
- 後藤佳世子. 1994. 『ニューヨーク・キャリアシーン』. マガジンハウス.
- 小宮隆太郎. 1961. 『アメリカン・ライフ』. 岩波新書.
- 在津秀紀. 1991. 『高校生・アメリカ留学つっぱり日記』. 泰流社.
- 栄陽子. 1992. 『女が留学するとき』. 主婦と生活社.
- 坂野尚子. 1993. 『出ようかニッポン, 女31アメリカ・中国をゆく』. 講談社文庫.
- 佐川不二男. 1991. 『熟年者の米国留学記——オレゴンの空の下で』. 北海道新聞社.
- ザック, ナカコ・O. 1992. 『アメリカ臨床レポート——日本人が知らない「危険な社会」の真実』. 三交社.
- 佐藤育代. 1995. 『海外で差別されたことありますか——はだかの“名誉白人”』. 主婦の友社.
- 佐藤和夫. 1989. 『アメリカの社会と大学』. 日本評論社.
- 佐藤隆三. 1982. 『ミー時代のアメリカ——「私」優先社会の危機』. 日本経済新聞社.
- 猿谷要. 1979. 『アメリカ南部の旅』. 岩波新書.
- *白井昇. 1981. 『カリフォルニア日系人強制収容所』. 河出書房新社.
- 篠田有子. 1984. 『母と子のアメリカ——幼児教育の未来をさぐる』. 中公新書.
- 司馬遼太郎. 1986. 『アメリカ素描』. 新潮文庫.
- 島村麻里. 1993. 『バービー, あなたはどこにいくの』. マガジンハウス.
- 下村満子. 1990. 『ハーバード・メモリーズ——アメリカのこと・日本のこと』. PHP 文庫.
- 城山三郎. 1984. 『アメリカ細密バス旅行』. 文春文庫.
- . 1985. 『海外とは日本人にとって何か——経済最前線をゆく』. 文春文庫.
- . 1987. 『アメリカ生きがいの旅』. 文春文庫.
- ジョセフ, ケン. 1989. 『ハロー……た・す・け・て!!』. アルク.
- 末吉節子. 1993. 『アメリカンスクール』. 同時代社.
- 杉本鉦子著, 大岩美代訳. 1994. 『武士の娘』. ちくま文庫.

- 隅井孝雄, 1989. 『マンハッタン・TVのぞき窓』, リベラ出版.
- 関本紀美子, 1985. 『アメリカ子育て新事情』, フレーベル館.
- 瀬光悟, 1992. 『アメリカよもっと勉強しろ——日本人教師 U.S.A. を斬る』, ミリオン書房.
- 谷沢慎一郎, 1991. 『住んでみたニューヨーク——ワールド・キャピタルの躍動』, サイマル出版会.
- 田中英夫, 1972. 『アメリカの社会と法——印象的スケッチ』, 東京大学出版会.
- 田辺厚子, 1992. 『女が外国へ出るとき』, 文春文庫.
- 為田英一郎, 1983. 『ニューヨーク人間模様』, 朝日文庫.
- 千葉敦子, 1990. 『ニューヨークでがんと生きる』, 文春文庫.
- , 1993. 『昨日と違う今日を生きる』, 角川文庫.
- 土谷守章, 1974. 『ハーバード・ビジネス・スクールにて』, 中公新書.
- *鶴木眞, 1976. 『日系アメリカ人』, 講談社.
- 鶴見俊輔, 1971. 『北米体験再考』, 岩波新書.
- 鶴見俊輔, 亀井俊介, 1979. 『エナジー対話・第15号・アメリカ』, エッソ・スタンダード石油株式会社広報部.
- デイ多佳子, 1992. 『アメリカ社会にチャレンジ——活躍する日本女性たち』, 明石書店.
- 寺澤芳男, 1989. 『ウォール・ストリート日記——アメリカビジネスマンの昼と夜』, 角川文庫.
- 寺山修司, 1993. 『アメリカ地獄めぐり』, 河出文庫.
- ドウス昌代, 1980. 『私が帰る二つの国』, 文藝春秋.
- *トビン, ジョセフ, 1983. 『ニッポン幻想——〈甘え〉から見た日米文化比較』, 講談社.
- 中井貴恵, 1990. 『貴恵のニューイングランド物語——信号3つの町に暮らして』, 文化出版局.
- 長尾龍一, 1984. 『アメリカ知的冒険旅行』, 日本評論社.
- 中上健次, 1985. 『アメリカ・アメリカ』, 角川書店.
- 中川剛, 1989. 『日本人の法感覚』, 講談社現代新書.
- 中川六平編, 1991. 『外国体験のパッチワーク』, 現代書館.
- 中里喜昭, 1980. 『歩く, 考える, アメリカ』, 晩聲社ヤゲンブラ選書.
- ナカノ, メイ・T, 1990. 『日系アメリカ女性三世代の100年』, サイマル出版会.
- 長沼秀世, 1985. 『ニューヨークの憂鬱——豊かさと快適さの裏側』, 中公新書.
- 中村喜春, 1987. 『わたしはアメリカが好き』, 草思社.
- 中野英子, 1975. 『アメリカでの暮らし方——駐在員のために』, 日本交通公社出版事務局.
- 中山俊明, 1983. 『ルイジアナ・ママを誰も知らない——スナップ的アメリカ論』, 旺文社文庫.
- , 1984. 『アメリカがつぶやく——出会いと再会の旅』, 旺文社文庫.
- 西部邁, 1979. 『蜃気楼の中へ——遅ればせのアメリカ体験記』, 日本評論社.
- 西村守, 1990. 『おもしろいかも, つむじ風』, 筑摩書房.
- 野田香里, 1992. 『ニューヨークからの採用通知素顔のワーキングウーマン・ストーリー』, ダイヤモンド社.
- 芳賀武, 1985. 『紐育ラプソディ——ある日本人米共産党員の回想』, 朝日新聞社.
- 馬場恭子, 1993. 『アメリカ変貌——女性ジャーナリストが捉える』, 文藝春秋.
- 浜田宏一, 1993. 『エール大学の書齋から——経済学者の日米体験比較』, NTT出版.
- ハロラン美美子, 1979. 『ワシントンの街から』, 文藝春秋.
- , 1988. 『ティーンエージ・ブルース——ルポタージュ・米国の教育改革』, 日本経済新聞社.
- , 1992. 『異文化体験——アメリカからの風アジアからの波』, 日本経済新聞社.
- , 1995. 『ホノルルからの手紙——世界をハワイから見る』, 中公新書.
- 久田俊夫, 1991. 『シンドカッタ大冒険 in U.S.A.——留学家族が見た薄情なアメリカ』, 白馬出版.
- 平形澄子, 1990. 『カルチャー・ギャップ——帰国子女体験レポート』, マガジンハウス.
- 平示右弘, 鶴田欣也編, 1990. 『内なる壁——外国人の日本人像・日本人の外国人像』, TBSブリタニカ.
- 平田一二, 1987. 『キャリア留学のすすめ』, ジャパンタイムズ.
- 平田十二, 1992. 『成田発 OL 便——キャリア留学相談室レポート』, 三省堂.
- 広中和歌子, 1979. 『ふたつの文化の間で』, 文化出版局.
- ファークス, ジェニファー, 河野守夫, 1987. 『アメリカの日本人生徒たち』, 東京書籍.
- 福家成子, 1990. 『魅せられてニューヨーク——日本人ワーキングガールたちの現在』, 寝々堂.
- , 1991. 『会社やめて, 留学しますニューヨークへ行った普通の OL たちの物語』, ダイヤモンド社.
- 藤松忠夫, 1989. 『いまニューヨーク』, 潮出版社.
- 藤原新也, 1990. 『アメリカ』, 情報センター.
- 星新一, 1978. 『明治・父・アメリカ』, 新潮文庫.
- 本田靖春, 1981. 『ニューヨークの日本人』, 講談社文庫.
- , 1987. 『新・ニューヨークの日本人』, 講談社文庫.
- 松浦秀明, 1981. 『米国さらりーまん事情』, 東洋経済新報.
- 松岡将, 1981. 『住んでみたアメリカ——土と車とク

- レジットカード』、サイマル出版会。
- 松本修一、1991、『マンハッタン5丁目ルームナンバ
ー10』、博報堂出版。
- 松原淳子、1993、『「英語できます」』、文春文庫。
- 松山幸雄、1988、『新版甘い国から来た男——親米家
から反米家へ』、朝日文庫。
- 三井徹、1986、『コラムB面のアメリカ』、草思社。
- 光森明子、1990、『アメリカ人のあたりまえ——異文
化社会を痛快に生きる』、主婦の友社。
- 宮地敏子、1987、『サムライハットニューヨークを行
く』、国土社。
- 宮本倫好、1995、『アメリカ戦後五十年——ジャーナ
リストの見た半世紀』、丸善ライブラリー。
- 宮本美智子、1982、『アメリカが嫌いだった父へ』、草
思社。
- 、1984、『ニューヨーク女三代記』、文春文庫。
- 、1984、『わたしは英語が大好きだった』、文藝
春秋。
- 、1989、『わたしの二都物語』、文藝春秋。
- 村井由美子、1994、『マコとスージの物語』、講談社。
- 村上春樹、1994、『やがて哀しき外国語』、講談社。
- ムルハーン千栄子、1992、『ライブ・アメリカ——街
角の対日感覚』、中央公論社。
- 、1993、『おんな教授アメリカ33年』、文藝春秋。
- 群ようこ、1991、『アメリカ居すわり一人旅』、角川文庫。
- *森茂岳雄編著、1999、『多文化社会アメリカにおける
国民統合と日系人学習』、明石書店。
- 安岡章太郎、1962、『アメリカ感傷旅行』、岩波新書。
- 、1975、『アメリカそれから』、角川文庫。
- 矢谷暢一郎、1992、『アメリカを訴えた日本人——自
由社会の裂け目に落ちて』、毎日新聞。
- 柳原和子、1994、『「在外」日本人』、晶文社。
- 山口光朔、1971、『狂気のアメリカ』、教文館。
- 山下洋輔、1992、『アメリカ乱入事始め』、文春文庫。
- 山田久美、1991、『ボストンに恋して——私が見たほ
んとうのアメリカ』、主婦と生活社。
- 山田勝、1985、『アメリカ感ライフ』、三修社。
- 山本道子、1977、『ベティさんの庭』、新潮文庫。
- 山本美知子、1993、『アメリカ暮らしの生き方美人
——窮屈な日本に住まない女たち』、亜紀書房。
- 湯川千恵子、1974、『主婦のアメリカ体験』、日貿出版社。
- 吉岡しげ美、1989、『アメリカで与謝野晶子をうたえ
ば』、朝日新聞社。
- 吉岡忍、1989、『散るアメリカ』、中公文庫。
- 吉川裕子、1975、『孤独なアメリカ人』、講談社現代新書。
- 吉田ルイ子、1983、『自分をさがして旅に生きてます』、
講談社文庫。
- 、1986、『吉田ルイ子のアメリカ』、講談社文庫。
- ラバン、ジョナサン著、山村宜子訳、1993、『アメリカ
発見の旅——新世界を追った昔と今』、心交社。
- *若槻泰雄、1972、『排日の歴史——アメリカにおける
日本人移民』、中央公論社。
- 我妻洋、1985、『日本人とアメリカ人ここが大違い
——貿易摩擦の底にひそむ誤解と偏見』、文藝春秋
ネスコボックス。
- 、1985、『性の実験』、文春文庫。
- 、1987、『社会心理学入門(上)』、講談社学術文庫。
- 、1987、『社会心理学入門(下)』、講談社学術文庫。